

## 傾城阿波の鳴門 巡礼歌の段 十郎兵衛内の段

「傾城阿波の鳴門」で語られる巡礼おつるの物語は、その哀切な浄瑠璃節と三味線で語られる親と子の情感が人々の心を捉えてきたのですが、浄瑠璃の台本は文学作品として読むだけでも結構面白い。試みにこの巡礼おつるの悲劇を、演劇の台本のように書いてみました

### 1. 巡礼歌の段

舞台は大坂玉造、今は盗賊の一味に身を落とした銀十郎こと阿波十郎兵衛と、その妻お弓の隠れ住まい。十郎兵衛の留守中にやってきた借金取りの武太六を、お弓がなんとか追い返したところへ、巡礼姿のおつるがやってきて  
普陀落や、岸打つ波は三熊野の、那智の御山に、響く滝津瀬。  
年は漸々とうどうの、道をかけたるおいする笈摺ぼるぼるに、同行二人と記せしは、  
一人は大悲の影頼む。ふるさとを、遙々こゝに、紀三井寺。

**巡礼** 順礼に御報謝、下さりませ。

**お弓** これは可愛らしい順礼衆、いずこの国からお出でかえ？

(と、盆に白米の志を巡礼姿の娘に与えると、娘は丁寧<sup>ていねい</sup>に礼を言いながら)

**巡礼** はい、国は阿波の徳島でございます。

**お弓** おやまあ、阿波の徳島、それはそれは懐しい。わたしも生まれは阿波の徳島。それで父様や母様と一緒に順礼されているのかえ？

**巡礼** その父様や母様に逢いたさ故に、西国するのでございます。

**お弓** 父様や母様に逢いたさに、西国するとはまたどうした訳で？

**巡礼** はい、三つの年に父様や母様は、わたしを婆様に預けて、出て行かれたのでございます。それでわたしは婆様の世話になっていましたが、父様や母様に逢いたい、顔が見たい。それで方々、尋ね歩いているのでございます。

**お弓** その親達の名は何と。

**巡礼** はい、父様の名は十郎兵衛、母様の名はお弓と申します。

と、聞いてびっくり、父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年に別れて、婆様に育てられたとは、疑いもない我が娘、「ヤレ我子が、懐しや」と言おうとしたが、待て暫し。夫婦は今は世を憚る身、名乗り立てして憂目を見るより、名のらず帰すのがこの子の為と、心を鎮めよそよそしく。



お弓 おお、それはまあ、まだ年端もいかぬに遥々と、よう尋ねて来られたな。  
可愛い子を振り捨てて、国を立退く親御の心は、よくよくの事でありましょう。  
ひどい親と恨まぬように、恨まぬように

巡礼 いえいえ、何の恨みに思いましょう。小さい時に別れた故、父様や母様の  
顔も知りませぬ。よその子供衆が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寝  
るのを見ると、わたしも母様があるならあの様に髪結うて貰おうものと、羨や  
ましいのでございます。

お弓 さてもさても哀しいことを。これからどれ程尋ねたとて、顔も所も分から  
ぬ親達、もう尋ねるのは諦めて、どうぞ国へと戻るがよい。

巡礼 恋しい父様や母様のこと、たとへいつ迄かかろうとも、お会いするまでは  
戻りませぬ。でも悲しいのは一人旅、何処の宿でも泊めてはくれませぬ、怖い事  
や悲しい事も、父様や母様と一所ならと、それが悲しいのでございます。

お弓 おお、そのようないじらしいことを。無事でいるなら、また逢われない物  
でもない。悪い事は言わぬ、これから直ぐに国へ去んで、親達が尋ねて会いに  
行くのを待つているのが賢明というもの。（と、泣きながら説き聞かす）

巡礼 はい、かたじけのうござります。その様に言うて泣いて下さりますのは、  
どうやら母様の様に思われて、私は此処を去りとうない。申しお家様、どんな  
事でも致します。どうぞ御傍にいつ迄も、わたしを置いて下さりませ。

お弓 ええ、悲しい事を言い出して、又この私を泣かすのかえ。そなたはまこと  
にわが子の様、去なしとうないと思えども、ここに置いては為にならぬ。それ  
でつれなく去なすのです。さあ聞分けて去んで下され。

言いつつ針箱の、底を探して豆板の餞別と、紙に包んで持って出て

お弓 これ、何ぼ一人旅でも、たんと銭さへやりゃ泊める。わづかなれども志、  
この金を路銀にして、早う国へ帰りなされ。（と、金を渡せば押し戻し）

巡礼 はい、有難うございます。でも金は小判といふ物を、たんと持っております。  
そんならこれで去んじます、かたじけのうござります。

と、泣く泣く立って行こうとするのを引き留め、用意の餞別を無理に持たして、  
コレ、もう去にやるか、名残りが惜しい、別れとうない、コレ、マ今一度  
顔をと引き寄せて、見れば見る程胸迫り、離れ難なき憂き思ひ、それと知  
らねど誠の血筋、名残り惜しげに振り返り、父母の、恵みも深き粉川寺、  
泣く泣く別れ行く跡を、見送り見送り延び上り

お弓 コレ娘、いま一度こちらを向いて下され、いま一度こちらを……。

と、そのままそこにどうと伏し、消え入るばかり嘆きしが、起直つて涙を押しへ、

お弓 イヤイヤ、どう思ひ諦めても、今別れては又逢ふ事はかなわぬ身の上、た

とへ難儀がかかろうとて、又その時はその思案、まだ遠くは行くまい追い付いて、連れて戻らう。そうじゃ、そうじゃ。

と、子に迷ふ、道は親子の別れ道、後を慕うて、尋ね行く。

## 2. 十郎兵衛内の段

十郎兵衛とおつるが家の表に表れる。「女房共、戻つたぞ」と、内へ這入つて見廻し、「これは、この日暮れ時に火も灯さず、うちのカミ様は何処へおじゃった」と呟きつつ、家に上がり行燈を灯して煙草盆提げ、どつさりと高胡座。家の門口で入るのをためらっている、おつるに声をかける。

十郎 さあさあ、娘、入れ入れ。今戻る道で乞食共が寄り集り、そなたの身を剥いで、金を取らうと謀っていたが、そなた、本当に金でも持つて居やるのか？

巡礼 はい、他所の小母様に貰うて持つて居ります。

十郎 おお、それは危ない、危ない、してその金はどれ程ある？

巡礼 はい、これ程ございます。（と、貰うた金を差し出して）

十郎 なんじゃこりゃ小玉が五十匁ばかりのはした金。もう外に金はないのか。

巡礼 まだ、小判という物がたんとございます。

十郎 なに、小判がたんとある、アノ小判が、それはよい物を持つて居る、はは……。この辺りは物騒故、その様に子供が金を持つて居るとつい人に取られてしまう。どれ、わしが預ってやろう、此処へ出しや。

巡礼 この財布の中の物は、決して人に見せるなと婆様に言われております。

十郎 ええい、その様に隠すと、為にならないぞ。（ト、眼を怒らし）

巡礼 さあ、それでも大事の金じゃもの。

十郎 その大事の金ゆえ、持っているとならぬ。片意地言はず預けておきや。

巡礼 エ、こんな所に居る事は、もう嫌じゃ。

「あれ、怖い怖い」と、逃げ出そうとするおつるの首筋を十郎兵衛が引掴み、

十郎 ええい、<sup>うる</sup>喧しい、近所へ聞こえるではないか。声が高い。（と、おつるの口へ手を当て）これ、何も怖がる事はない、わしもちょっと金の要り用がある。それゆえ何ば程有るか知らぬが、二三日預けてくれ。その内にはまた拵へて戻そう程に、それ迄はこちらにゆるりと逗留して、又観音様へも連れて行ってやろう。よい子じゃ、よいこじゃ聞分けて、ここへ有り金出してくれ。



と、十郎兵衛がおつるを放せば、がっくりと、そこへそのまま倒れる娘。

十郎 コリヤ何とした、どうした (と、言へども娘は即死の有様) 南無三宝、こりゃ順礼の娘やい (と、呼び活け呼び活け、口押し開き) ええい、声を立てさせまいと、思わず口へ手を当てたが、思はず息を留め、それで死んだか、これはまた、不憫なことをしてしもうたわ

とばかり、呆れ果たる折から、表に足音が聞こえてきて、「すわ女房が帰ってきたか」と、蒲団で娘の死骸を隠したところへ、お弓が入って

お弓 あれ、うちの人戻っていたか、サア、ちょっと私の話を尋ねておくれ。

十郎 えい、<sup>うろたえ</sup>狼狽るな、後先見ずに尋ねてとは、そりゃ一体何を尋ねるのじゃ。

お弓 されば、お前の留守のその間に、国に残した娘のおつるが、不思議なことにここへ尋ねて来たのだよ。

十郎 何、娘が来た ? そりゃマア何かい、母者と一緒にか?

お弓 いいえ、やって来たのはおつる一人、不思議に娘と知ったからには、飛び付く様に思うたけれども、悲しい事に私もお前もお尋ねの身。

十郎 これ、そのように大きな声で、誰かが聞いているかも知れぬではないか。

お弓 お尋ねの身ならば、わざと親子の名乗りもせず、気強う言うて去なしたが、どうも捨てて置かれもせず、後から捜しに出たけれど、影も形も知れぬ故、お前さまと手分けして捜そうと思って戻った。さあ、共に行行って捜して下され。

十郎 何とたわけめ。おれにも知らさず去なすとは、鬼でもそんな事はせぬわい。その子とやらは、幾つばかりで、どんな着物着て居るぞ。

お弓 ハテ知れた事、年は九つ、中形の振り袖に、笈摺掛けて。

十郎 何、笈摺掛けて と

お弓 アイナ、笈摺も二親のある子なれば、両方はこう茜染。

十郎 アノ茜染に、中形か (ハッと肝に焼鉄刺さる心地)

お弓 さあ、急いで捜さねば心が済まぬ。お前さまは後から私は先に。

と、言いつつ駆け出そうとするお弓を留め、

十郎 待て待て、もう捜すのは止しにせい。娘はどうから戻っているわい。

お弓 ええ? 戻つて居る?、戻つて居るとは、そりゃまあ、何処に?

十郎 ソレ、そこの蒲団の内に、よう寝入つて居るわい。

と、言われるも不審に思い、蒲団を明けて顔見るより、

お弓 まあ、本当に娘じゃ娘じゃ、何と嬉しいこと。お前さまもこんな事なら、どうからそうと言うて下され。(言いつつも気はいそいそと) 何とマア大きくなって。いかにもくたびれた様子、からげも下ろさず、笈摺も掛けたなり。どれどれ帯を解いてゆっくりと、久しぶりで母が添に寝かせてやろう。

と、笈摺外し帯を解き、見れば手足も冷たく、息も通はぬ娘の死骸。

**お弓** あれ、これは、娘は死んでいるではないか。どうしてじゃ、娘はどうして死んだ、お前さまは仔細を知っておいでの様子。さあ、言うて聞かして、聞かして下されませ。

**十郎** さっき家へ戻る道で、その娘が金を持つて居るを、非人共が取るの剥ぐのと聞いた故、可愛そうにと連れ戻り、二三日貸してくれと訳を言えども子供の事、声立てて泣き喚く。つつい口を押えたが息が詰つて、その様に死んでしもうた。えい、可愛そうな事した、それが娘であったとは

**お弓** 何と、それならお前さまが殺したのか。はてさて是非もなや、情けなや。(と、死骸を抱き上げ、)これ娘、これ程酷い父母を、よう尋ねてくれました。怖い事や悲しい事も、父様や母様に逢ひたさ故と聞いた時は、悲しうて悲しうて、今さらながら親と名乗らず去なしたのが悔やまれる。その時留めていたならば、こんなことにはならなかったろうに。堪忍して下され。堪忍して下され。別れに歌うていた順礼歌、父母の恵みも探き粉川寺。どこにこれが恵みが深い、こんな酷い両親が、広い唐にも天竺にも、まあ二人とある物が。

と、死骸の顔に我が顔を、押し当て押し当て抱きしめて、流す涙に伏し沈む。  
とその時、俄かに騒ぐ声足音、十郎兵衛これを聞きつけ、つと心付き、

**十郎** これは如何に女房殿、あの物音は捕りに違ひない。何百人取り巻くとも、刀を我が手に入れん内は、切つて切つて切り抜ける

と、娘の死骸を抱き抱え、泣き入る女房を引立て引立て、家の奥へと入りに行く。程なく来たる捕手の大勢、「ヤアヤア、盗賊の銀十郎、本名は阿波の十郎兵衛、この所に隠れ住む由、召し捕りに参った。尋常に縄掛かれ」と押し寄せせるが、十郎兵衛一人に切り捲くられ、皆蜘蛛の子の散り散りに、逃げ行くすきに、十郎兵衛とお弓は娘の死骸に手を合わせ

**十郎・お弓** どうぞ、この親共を許しておくれ、この通り。

と死骸の上に戸障子積み、松明の火を差し付けて、人手に渡さぬ火葬の営み、「南無阿弥陀仏」と合わず手も、別れ、別れて立ち出づる。

